

鹿児島医セン

鹿児島医療センター（循環器・脳卒中・がん専門施設）

2013.3

vol. 83

退官のご挨拶



本年 3 月末をもって定年退官することになりました。長い間、皆様には御指導いただきまことにありがとうございました。心から感謝申し上げます。

私は、平成 3 年 1 月に心臓血管外科医長として当院へ赴任し、以来 22 年間当院で働かせていただきました。心臓外科医としては多くの方に支えられ、赴任以来 4200 例を越す心臓大血管手術に関与できました。その上に、統括診療部長（平成 17 年）、副院長（平成 19 年）、

院長（平成 21 年）と管理職まで経験させていただき、個人的には充実した 22 年間でした。

当院は平成 16 年に独立行政法人化され、それまでの国立時代と異なり、独立採算制となりました。大いに自由度が増すものと期待しましたが、残念ながら国家公務員並みの身分と、国立病院機構の中の一病院としての統制も受けざるを得ず、思い通りにはなりません。民主党政権下で非公務員化されることが閣議決定まではされましたが、政権交代により凍結されてしまい、今後の見通しは立っていないのが現状です。早く非公務員型の独立行政法人になり、地域医療へ多くの貢献ができるようになることを期待しています。

当院は平成 18 年、中村前院長により従来の九州循環器病センターの名称から鹿児島医療センターへと病院名を変更し、循環器、脳卒中、がんの診療を三本柱として地域に貢献していくことを改めて表明しました。私は平成 21 年その後を引き継ぎ、継承と発展をかねてこの 4 年間をやってきました。幸いスタッフに恵まれ、電子カルテの導入稼働、メディカルサポートセンターの立ち上げ、東 3 階病棟（女性病棟）の改装による混合病棟化、地域連携懇談会の開催、病院機能評価受審などを行うことができました。経営基盤はまだ磐石とは言えませんが、まずまずの黒字経営ができるようになってきました。

私の後は花田副院長が引き継いでくれることになっています。新しい体制になりますが、現在進行中のこととして CT2 台稼働を目指して工事中で、完成後（4 月から）は早期に検査できるようになるものと思います。また、3 月からは歯科医師が常駐し、患者さんの口腔ケアを日常的に担当してもらえるようになりました。これからも病院は少しずつ進化していくものと思います。今後とも皆様の御支援をいただき、地域に無くてはならない病院を目指して頑張っていかなければならないと考えています。鹿児島医療センターをどうぞよろしくお願いいたします。

皆様にはこの 4 年間本当にお世話になり、ありがとうございました。退官後は一心臓外科医として後進の育成や地域医療に貢献していきたいと考えております。よろしくお願いいたします。

院長：山下正文

退官のご挨拶

皆様へ感謝！お世話になりました

看護部長：中 重 敬 子



いよいよ卒業することになりました。
昭和 49 年 3 月に国立都城病院附属看護学校を卒業後、大阪の病院、地元の国立療養所に勤務し、平成 2 年から看護師長として宮崎東病院、平成 5 年 1 月から平成 12 年 3 月まで、国立南九州中央病院（現；鹿児島医療センター）に勤務しました。その後副看護部長から看護部長として日南病院、熊本医療センター、長崎神経医療センター（現；長崎川棚医療センター）、都城病院を経て、平成 22 年度から最後の 3 年間で勤務致しました。結局、鹿児島医療センターは、合算して 11 年 3 か月お世話になったこととなります。

国立病院機構は管理者の転勤は必須ですが、この転勤のお蔭様で学習する機会が増え、自分の転機に繋がったと思います。特に看護部長は約 3 年ごとの異動になりますが、前任者が築いた看護管理を大事にしながら、新しいことを積み重ねていきますので、看護管理が断裂しない体制であり、自分自身の成長に繋がったと思います。お世話になった 7 施設の中のある院長先生が赴任時に、「看護部長は風だと思ふ。色々な風を吹かせていい仕事をして欲しい。あなたはどんな風を吹かせるか楽しみだ」と言われました。どんな風？と不安でしたが、兎に角使命感を持ち頑張るのみと続けてきました。まだまだ不完全な私を、大目に見ていただき、ご指導していただいた各施設の院長先生、事務部長さん、九州ブロック事務所、国立病院機構本部の方々、そして看護職員の皆様本当に感謝致しております。ありがとうございました。

平成 24 年度は、4 月メディカルサポートセンター開設、7 月電子カルテ導入、極めつけ 2 月の病院機能評価初回受審は、相当な作業と管理の見直しがありクタクタ状態になりましたが、看護部門も高く評価するという総評をいただきました。審査結果は退職後に院外で聞くこととなりますが、定年を迎える最後の年に看護管理者として、いい締めくくりをさせていただきました。

今後は、まだ社会に貢献していきたいと思っております。同じ医療職としてまだまだお世話になることと思います。今後ともご指導よろしくお願い致します。

看護学校の取り組み

鹿児島医療センター附属鹿児島看護学校副校長
川 村 優 美 子



私は平成 21 年 4 月に本校に赴任し、恵まれた職場環境の中で 4 年間の勤務を終了することができました。その間に学校職員と共に取り組みました以下の 5 項目について述べさせていただきます。

1. 本校の教育理念、方針に基づく教育の提供
2. 安全で最適な学習環境の提供
3. 安定した学校運営
4. 看護教育、研修、研究の推進
5. 看護教育機関としての地域貢献

本校の教育理念である「ヒューマンケアの実践者を育てる」を念頭に、専門職としての看護実践力、自主性の育成については授業、実習における場のみでなく、日常生活における基盤づくりが重要であると考え支援してきた。

学習環境の整備については校舎建物の耐震工事や、校舎全館の空調設備の更新、カリキュラム改正に伴う在宅・母子実習室、情報科学室の整備、コンピューター等教材教具についても整えることができ、学習をより充実させることが可能となった。

また、学校内にも安全推進担当者を配置し、医療センターの安全管理者や感染対策委員会と連携を取り学校、実習場における事故防止や感染防止に努めることができた。

学校運営に関しては受験生の確保に力を入れて来た。職員はもちろん、学生も参加しての広報活動の効果が競争率 3 倍以上はキープしている。国立病院機構への就職寄与率も上昇傾向にある。

研修、研究等の推進に関しては、平成 23 年度より機構本部より看護教員に研究助成金が保障されたこともあり専門領域研修会への参加や学会へ発表することができた。

教育機関としての地域貢献については、近隣の老人会、県内の高校教諭等を対象に公開講座を年 3 回開催した。また、教員養成講習会等の実習生を受け入れたり、各種研修会の講師として職員を派遣した。

平成 25 年 4 月の入学生より学生定員が 120 名より 80 名となります。

学生をいつも暖かく見守っていただきました院内、外の講師の先生方、実習指導に携わって頂いた関係職員の皆様へ感謝申し上げます。

未来へ向けて鹿児島医療センター並びに看護学校の益々の発展を祈念し挨拶と致します。

中間管理者研修

平成 24 年度の中間管理者研修会を 2 月 1 日と 2 日の 2 日間、例年通り国民宿舎レインボー桜島で開催いたしました。今年度は、数日後に病院機能評価の受審を控えての開催となり、病院機能評価の準備で忙しい中、2 月 1 日は 101 名、2 月 2 日は 92 名と多数参加いただきました。2 日間にわたり”コーチングを学習すると何が変わるのでしょうか”というテーマで佐世保中央病院糖尿病センターの松本一成先生にご講演いただきました。松本先生には平成 24 年 2 月にも当院にてコーチングスキル研修会でお越しいただいており、今回 2 度目となります。本年度はグループワークは行わずに、ロールプレイを交えながら講演していただきました。1 日目はコーチング総論として医療現場として職員間のコミュニケーションをはかるということ、そして 2 日目は糖尿病を例に”患者さんのやる気を引き出す特別な方法”の基本スキルを学びました。人とコミュニケーションをはかるスキルを学ぶこと、これは私たちが今まで学校では学ぶことがなかった分野だと思えます。医療現場においては人とコミュニケーションをはかること、それが職員間であったり、患者さんの治療の場においていかに重要であるかを教えていただきました。松本先生はこのコーチングスキルはやはり繰り返し研修を受けることが重要と話しておられました。

今年は司会を上田師長が担当し、1 日目は講演会の後の懇親会では余興が始まり楽しいひとときを過ごしました。また、2 次会ではコーチングスキルを学んだ後で早速、今までの自分がいかに患者さんと接してきたかについて反省しきり、の会となり遅くまで話がつきませんでした。

今年は多忙な中、準備不足をお詫びいたしますが、職員間でのコミュニケーション、そして患者さんと同じ目線で話をする、など非常に重要なスキルを学んだことと思えます。そして日常の医療現場において即、実践できるものと考えました。

文責：血液内科医長 大塚 眞 紀



職場紹介

西 3 階病棟看護師長：米 森 初 枝

西 3 階病棟は耳鼻咽喉科と消化器内科の混合病棟で、入院患者の 8 割の方ががんの治療・療養をされています。そのため診断の時点から緩和ケアの提供ができることを目標に緩和ケアチームと連携し日々取り組んでいます。患者様・ご家族がどのように病気を受け止め、どのような支援を求めているのかを、医学的側面や患者・家族の意向等を考慮し、倫理的視点を含めた意思決定や症状マネジメントについて緩和ケアチームとともにカンファレンスで支援内容を検討しています。

また部署にはがん性疼痛認定看護師が配属されており、疼痛マネジメントに関しての教育や情報発信を病院内に行っています。

毎月第 2 土曜日に病院内で行われる喉頭摘出術を受けた患者会のあとに、病棟の食堂では音楽ボランティア、緩和ケアチームの協力により、ミニコンサートを実施しています。季節に合わせた選曲、患者様からのリクエストにも応じた内容で、コンサートの気分を味わっていただくために、今年度より手作りのチケットを配布しています。患者様が大切な人と過ごす特別な時間、緩和ケアの一環としての取り組みです。またお花見、花火大会、節分の豆まき、クリスマスコンサートと、入院していても日常を感じていただくために季節ごとの行事も大切にしています。

自宅で最期の時を過ごされ、家族に感謝の言葉を残して逝かれたと、自宅での様子をご家族が病棟を訪問して聞かせて頂き、自分達の支援を振り返る機会を得ていますが、できるだけ自宅で過ごしたいというニーズが多い状況の中で、患者・家族が治療の時期、終末期、それぞれの時期をどのように過ごしたいのか、思いに添えるよう支援していくことが課題です。そのためには患者・家族のセルフケア能力に依りて、退院後は社会の中で生活していく人ということに視点を当てた具体的な退院指導と活用できる資源の情報提供、地域との連携は不可欠と考えています。



平成24年度

がん・循環器病・脳卒中看護エキスパートナース研修の報告

教育担当師長：中村千鶴

鹿児島医療センターは、がん・循環器・脳卒中の3つを柱とした医療を提供しており、専門的な看護実践のできる看護師の育成を目的として、各領域のエキスパートナース研修を毎年開催致しております。循環器病看護エキスパートナース研修は、国立病院機構の九州ブロック主催研修で、九州管内の10施設14名の参加で実施しました。また、公開講座は、県内10施設より（表1）の通り多くの方々に参加していただきました。

研修名	期間	研修生参加数		公開講座参加数	
		院内	院外	院内	施設数・参加数
がん看護	7日間(9/18~26)	6名	5名	97名	10施設 103名
循環器病看護	8日間(10/22~10/31)	5名	9名 (九州管内)	182名	10施設 96名
脳卒中看護	7日間(12/3~12/11)	2名	10名	94名	9施設 182名

今年度の企画で新たに取り入れたことは、講義で学んだことと、臨床現場での実践を関連づけて理解できるように、毎日の講義後にグループセッションし施設の現状や気付いた事を討議できるようにしました。また病棟実習は、患者を受持ち、手術見学からICUでの集中的看護、心カテ治療、リハビリテーションの実際、退院支援までの一連の流れを学べるようにしました。

研修生の学びとしては、患者様の心理や背景を知りケアすることの大切さ、多職種カンファレンス実施や、患者・家族への入院時からの退院支援の重要性を実感できたことがアンケートやグループセッションでの意見から伺えました。研修後は、各領域の7人の認定看護師の指導を受けながら、カンファレンスの実施や心不全患者退院指導パンフレットの活用、脳卒中患者の発症早期からのベットサイドリハの実践に取り組みました。

今後も研修生個人のスキルアップだけではなく、それぞれの専門分野で看護実践のリーダーシップを発揮できるような看護師の育成ができるように、研修内容を充実させていきたいと思っております。

今回、3つの領域のエキスパートナース研修や公開講座に、多くの施設から参加していただき心より感謝申し上げます。平成25年度のがん看護・循環器病看護・脳卒中看護のエキスパートナース研修への皆様の参加をお待ちしております。

がん看護



グループセッション

循環器病看護



心臓リハビリ実習

脳卒中看護



手術室実習

■お問い合わせ先 独立行政法人
国立病院機構

鹿児島医療センター（循環器・脳卒中・がん専門施設）

〒892-0853 鹿児島市城山町8番1号

(代)TEL 099(223)1151 FAX 099(226)9246 <http://www.kagomc.jp>

【地域医療連携室】 茵田・今泉・永重・重吉・森・吉留・梁川・酒井・櫻木・近藤
直通電話▶099(223)4425 フリーダイヤルFAX専用▶0120(334)476
※休日・時間外は当直者で対応します。

